

アルタスファイブの社外報 2025 年夏号をお贈りします。

今号は「AI」と「働き方」をテーマに綴りました。

AIによって仕事のやり方が変わっていくことは、誰もが感じ取っているところですが、若い人たちが感じていることと、ベテランが思うところを、読み比べてみてください。似た内容の記事がちらほらありますが、各人各様の考えが記載されています。

最後まで目を通していただくと、ありがたく存じます。

この「アルタスファイブ通信」が、皆さまとの絆をより深めることを願っています。

公式キャラ

今号では、最初に当社の公式キャラを紹介させていただきます。

これから自社プロダクトなどを配信していきますので、そのときの広報係として活躍してもらいます。

よろしくお願いします。

ぴえーる



チームのリーダー。目標目指して、突き進む、チームの内燃機関。

あなーきー



赤いネコ。口が悪いけど、さっぱりした性格で、めっちゃ的確なことを言う、チームの参謀。

ぶろと



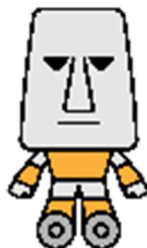
ラッパーで、つつい韻を踏んだコードを書いてしまうノッてるやつ。仕事がめちゃ早い、チームのエース。

りふぁ



癒し系魔法の使い手。チームが戦っているときには、後方支援で癒しの念仏シャワーを注いでくれる。チームにオアシスを与えてくれる存在。

でーびー



ロボであり、移動するときには、軽トラにトランスフォームする。仲間を乗せて、どこへでもいっちゃうチームの機動力。



軽トラにトランスフォーム

目次

01		AI システム開発から見た AI 主導開発へのシフト・・・・・・・・小池
02		AI で広がる開発の可能性と課題・・・・・・・・瓦谷
03		AI と歩む自律的な学びと働き方・・・・・・・・太田
04		開発における AI を用いた機能やサービスについて・・・・・・・・矢島
05		AI と“働き方”を考える「自分」を再発見するツールとしての AI 活用・・・・・・・・大成
06		AI 時代の働き方を考える・・・・・・・・板子
07		ChatGPT は頼れる先輩？優秀なパートナー？業務で使ってみて感じたこと・・・・沢辺
08		AI が仕事を奪う時代に、“働く意志”を持続けるということ・・・・・・・・雲居
09		実体験から考える「AI と仕事の付き合い方」・・・・・・・・鈴木
10		事業会社としての歩みを始めました・・・・・・・・佐藤
11		お菓子紹介・・・・・・・・宇野

AI システム開発から見た AI 主導開発へのシフト



開発部 小池

プロダクト開発において、テスト自動化は避けて通れないテーマです。特にテスト対象が個々の部品の動作確認といった狭い範囲から、サービス全体の流れや仕組み全体の検証へと広がるにつれ

て、直面する課題は一段と複雑で多様なものになります。

テスト自動化にはいくつかのレイヤーが存在します。もっとも低層のユニットテストが「入力されたメールアドレスの形式が正しいかチェックする機能」や「価格の計算機能」といった個々の部品が正しく動くかを確認するのに対し、高層にある E2E (End-to-End) テストは、例えばユーザーが商品を検索し、カートに入れ、決済を完了するまでといった、一連の操作全体が始めから終わりまで正しく機能するかを検証します。このように、ユーザーの体験全体を通して確認するテストでは、設計・実装の難易度やメンテナンスコストの高さなど、技術的ハードルが一気に高まるのが現実です。

そこで、E2E テストの全工程を AI で完結させるシステムを試験的に作成してみました。設計書からのテスト項目書の作成、テストの自動実行、エビデンス取得、そして結果判定までの一連の工程を AI に委任することができるものです。実際の動作に期待はしていませんでしたが、このシステムは予想を超えて与えられた工程をすべて実施できました。

もちろん、今回のシステムは精度や再現性などの実用面では大きな課題を残しています。それでもなお、「一連の工程を AI に丸投げして動かしてしまう」という手応えは、E2E テスト自動化の枠を超えた可能性を示唆していました。この事実、単に一つのタスクが自動化されたという以上に、開発という行為そのものの本質が変わりつつあることを示唆していました。それは、人間の役割がコードを一行ずつ書くことから、AI に実行させるべきプロセス全体を定義し、委任することへとシフトしていく未来の縮図に他なりませんでした。

この場合、人間が実装すべきは AI が担わない部分、すなわち AI へのデータ受け渡しや保存といった補助的な領域です。しかも、そのコードの大部分を開発環境に組み込まれた AI エージェントが生成します。設計書のドラフトすらも AI が作成し、もはや人間の役割は、AI が逸脱しないようナビゲートすることであり、開発プロセスの重心はシステムの内外で明らかに変化し始めています。

AI エージェントの登場は、これまで「補助的なツール」であった AI の立場を根本から変えつつあります。AI はもはや一作業ごとの補佐役ではなく、業務全体を動かす“ドライバー”として、その存在感を増しているのです。

従来、AI やツールは人間が使いこなすことで価値を創出してきました。しかし今、その主従関係は逆転し、AI がプロセス全体を牽引し、人間はその上位プロセスを設計・最適化する側へと移行しています。

この変化の本質は、単なる効率化や省力化ではありません。AI を最大限に活用するために求められるのは、個別の作業指示を精緻化することではなく、サービス全体を俯瞰し、AI を最適に動かすための「プロセス委任型プロンプト」を設計することが欠かせません。そして、この委任プロセスをテンプレート化し、業務設計のナレッジとして組織に蓄積することこそが、再現性と展開力を高め、企業全体の競争力強化へと繋がっていくものと考えます。

今後、AI が担う領域はますます広がり、人間が直接手を動かす範囲は着実に縮小していくでしょう。しかし、その中で「事前準備と設計プロセスを AI 最適化の対象と定義し、ナレッジとして蓄積する」という人間の役割は、これからの組織にとって不可欠な価値を持つことになります。

こうして蓄積されたナレッジは、AI が主軸となる時代において、次世代の業務基盤を形成し、事業の持続的成長を支える力となるはずです。

会社からの一言：

先日見たニュース動画では、プロンプトエンジニアという職は、もう不要になったとありました。ものすごい勢いで進化しています。この記事でのプロンプトも、オマジナイのようなプロンプトの書き方術ではなく、本質的に何を事前情報として伝えるのか、個別の指示はどのように与えるのか、その整理方法をメソッド化する必要があるのだと読みました。このノウハウの蓄積は、プロジェクトを超えて、全社的にやっていきたいですね。弊社では AI 利用が許可されたプロジェクトでは積極的に利用することを推奨しています。それだけではなく、利用事例を集めて、社内で AI 会議を招集してナレッジ共有を図るといったところまで進められたらなあと思っています。（佐藤）

02 AI で広がる開発の可能性と課題



開発部 瓦谷

今年で五年目になる開発部の瓦谷です。

前回執筆から一年が経過し、今年の二月にこれまで関わっていたプロジェクトから離れ、現在は別プロジェクトにて EC サイトの保守開発に携わっています(以下、本プロジェクト)。

新しい環境・業務内容となり、まだまだ分からないことも多いですが、周囲に追いつけるよう日々学びながら業務に取り組んでいます。

今回は、本プロジェクトにおける AI を活用した開発の取り組みについてご紹介します。

本プロジェクトでは、Slack 上で OpenAI、Claude、Gemini といった生成 AI に質問できるアプリを導入しています。

エラーの原因調査や、ちょっとした技術的な調べものにすぐ活用できる環境が整っており、私自身も頻繁に活用しています。

たとえば、エラー内容を投げて原因を特定してもらったり、記述方法を忘れてしまった際にサンプルコードを生成してもらったりと、日常的な開発業務の中でとても助けられています。

最近では、AI エージェントの Devin を活用する声も周囲で聞こえてきています。Devin は、指示を出すことで自動的にコードを生成し、そのまま Git にコミットまで行ってくれるとのこと。私自身はまだ触れていませんが、今後ぜひ業務で活用してみたいと考えています。

AI は非常に便利ですが、注意点もあります。

特に気を付けているのが「AI の回答が必ずしも正しいとは限らない」という点です。

たとえば、コードの書き方について質問した際、一般的な内容であれば正確な回答が得られますが、少し複雑なケースやプロジェクト特有の設定などが絡んでくると、誤った情報を返してることがあります。

実際に、ローカル環境でテスト環境を構築しようとした際、足りないライブラリについて AI に確認したところ、間違った情報を提示されたことがありました。

このように、AI の回答を鵜呑みにせず、自分で検証・精査することが重要です。

AI に質問する際は、その「聞き方」にも注意が必要です。

単にエラー文を貼るだけでは、正確な回答が得られないことが多く、状況や前提、どの部分が分からないのかなどを具体的に伝えることが大切です。

自分がどの情報を知りたいのかを明確にし、背景や目的を添えて質問することで、AI の回答精度も大きく変わります。

本プロジェクトを通して、AI は開発の効率化において非常に心強いツールであると感じています。一方で、その回答が常に正しいわけではないため、自分自身で判断しながら活用していく姿勢が求められます。また、AI を効果的に使うためには「正しい問いを立てる力」も重要です。

今後も AI とうまく付き合いながら、自分自身の技術力も磨いていけるよう、引き続き努力していきたいと思います。

会社からの一言：

私が LLM を使っていて思うことは、とにかくオーバーエンジニアリングだということです。そんなこと頼んでもいないのに、オプションな機能をたっぷり実装してくるので、余計なコードを剥がすのが面倒でした。最近、それを抑制するテクニックを見つけました。プロンプトの中に、「YAGNI 原則を遵守してコードを作成してください」と一文入れると、スッキリしたコードが返されるようになります。有名なプログラミングプラクティスは強めに作用するように設定されているかもです。LLM はミーハーとも言えるか。(佐藤)

03

AI と歩む自律的な学びと働き方



開発部 太田

最近はすっかり暑くなり、外に出るだけで汗が止まらない季節になりましたね。私自身はエアコンが少し苦手で、できれば扇風機だけで乗り切りたいと思っているのですが、工作中的のパソコンは

そうもいかず、結局はいまだに長袖が手放せない日々を送っています。はじめまして。この度、初めてアルタス通信を執筆させていただきます、開発部3年目の太田と申します。

今回は AI がテーマということで、AI をコーチとして学習プランを立て実践していることについて紡がせていただこうと存じます。

従来、学習計画を立てる際には、書籍やインターネットの情報を参考にしながら、計画していると存じます。参考があるとはいえ、結局は自身だけで考えていくため本当に学ぶ内容はこれで大丈夫なのか、計画が無理のない範囲となっているのかなどの不安を抱えながら立てておりました。

しかし今回、私は AI に自分の現在のスキルや学びたい内容、使える時間などを入力し、学習プランを提案してもらいました。すると、想像以上に具体的で現実的なプランを提示してくれました。さらに、進める中で感じた疑問や変更点についても AI に相談しながら調整を行うことで、計画を柔軟に更新し続けることができいております。まるで人間のコーチやメンターと対話しているかのような感覚で、自分ひとりで考えるよりも安心感と納得感を持ちながら学習を進められたのが印象的でした。

与えられた課題をただこなすのではなく、自ら課題を設定し、解決策を模索し、その過程で AI の力を借りる。こうした自律的な姿勢こそが、これからの時代における働き方の一つなのではないかと考えるようになりました。

もちろん、最終的に学びを深めたり仕事を進めたりするのは私たち自身の責任です。しかし、AI というパートナーがいることで、より安心して挑戦できる環境が整うのは大きな利点だと感じています。さらに、AI がそばにあるおかげで、これまで触れたことのない未知の領域にも気軽に踏み込みやすくなっていると個人的に感じています。

今後も AI をうまく活用しながら、主体的に学び続ける姿勢を大切にしていきたいと考えています。そして、その中で得た気づきや学びを、また皆さまと共有していけたら幸いです。

会社からの一言：

LLM にどのような依頼をしているか書かれていないのでわからないけど、寡黙なプロンプトになっていると、一般論しか返ってこなくて、堂々巡りになりやすく同じ質問を何度も繰り返す沼にハマります。より自分に適した学習計画を立てるためには、「01」の小池の記事にあるように、全体俯瞰というか、事前情報として、太田の性格や、現在のスキルレベルとか、得意と苦手な分野、目指しているキャリアの志向性などを示して、情報たっぷりなおしゃべりプロンプトで質問を投げると、自分だけの学習計画が返ってくると思います。

(佐藤)

04

開発における AI を用いた機能やサービスについて



開発部 矢島

最近、体重が 80 キロを超えてしまい、現在も少しずつ増えているので本格的に運動し始めないと大変なことになる気がしています。高校を卒業してからほとんど運動をしていないのでプランクを 3

セット行うことから始めようと思います。今回、初めてアルタス通信を執筆することになる、開発部 2 年目の矢島です。

今回は「AI」と「働き方」がテーマというのですが、私が参加しているプロジェクトではあまり AI を活用できていないので個人的に使ってみたい機能やサービスについてお話しさせていただきます。

1 つ目は AI に会議の議事録を作成してもらうことです。Google Meet を使用しているなら Gemini に、Microsoft Teams を使用しているなら Copilot を使用することで議事録を取ってもらうことができます。

現在私がお客様との定例で議事録を取っており、課題の説明や質問の解答なども記録しているのですが、その意図などの細かな部分まで記録できていないことが度々あります。この問題に対し、私の方で議事録を取りつつ AI にも議事録を取ってもらい、2 つの議事録を精査し、まとめることで会議の内容をより正確、詳細に記録できると考えています。

2 つ目は GitHub Copilot や Cursor などを用いたコーディング補助です。AI によるコード補完やエラーチェック、リファクタリングを活用することでコーディングの時間を短縮することができ、開発業務の効率化に繋げることができます。また、AI が提案したコードから新たな発想や知識を得ることもできるので自身のプログラミングスキルの向上にも繋げることができると思います。しかし、AI が提案したものが全て正しいとは限らないので、その点について考慮しながら活用していくことが大切だと思います。

今回は 2 点挙げさせていただきましたが、他にも AI を使った機能やサービスはいくつもあります。セキュリティ上の問題などで使用することができないサービスもありますが、使えるものは何でも使うという精神で活用していきたいと思います。

今後も AI は発展していくと思いますが、AI をどのようにして活用し、業務の効率化や、自身のスキルの向上や知識の習得に繋がられるかが重要だと思います。

会社からの一言：

これからの時代は、エラーの stack trace のログを読めなくなる人が増えそうだと思います。エラーログには、エラー原因を追跡できる情報を含めて出力しておくことがセオリーだけど、それも AI が実装して、エラー解析も AI がやるのなら、stack trace を読めなくても開発は回るか。それでよいのかどうかは、もう少し先にならないとわからないので、今の時点では、セオリーは学んでおくことにしましょう。（佐藤）

05

AI と“働き方”を考える「自分」を再発見するツールとしての AI 活用

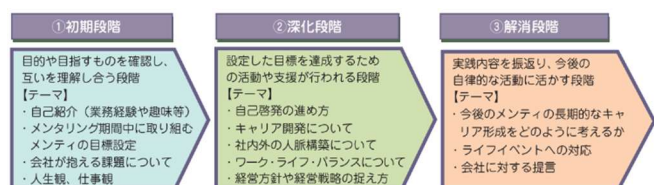


管理部 大成

Altus-Five では、数年前からメンター制度を導入しています。これは新入社員（メンティー）に対し、先輩社員（メンター）がキャリア形成上の課題解決を支援し、個人の成長や職場内での悩み・問題解決をサポート

する個別支援制度です。

厚生労働省では、メンター制度の導入にあたって「初期段階」「深化段階」「解消段階」という 3 つのステップを進めることを推奨しています。



出典：厚生労働省（2012）「女性社員の活躍を推進するためのメンター制度導入・ロールモデル普及マニュアル」 p.13

Altus-Five のメンター制度も、この 3 ステップに基づき、新人研修が終わった 6 月から翌年 3 月までの約 10 か月間を適用期間としています。初期段階では、メンター・メンティー間の関係性の構築を重視し、深化段階ではキャリア開発を、そ

して解消段階では今後のキャリア形成について考えるフェーズへと進んでいきます。

当社では、入社 2 年目の社員がメンターを務めることが多く、キャリアに関するアドバイスには難しさもあります。そこで一つの工夫として、メンティー自身が自分の強みや可能性に気づき、より納得感のあるキャリアを描けるよう、「ストレングスファインダー」による強みの可視化を行いました。

自己認識はキャリア形成の第一歩です。しかし、強みを知っただけでは次のアクションにはつながりにくいものです。そこで、「強みをどう活かすか」「どんな未来の可能性があるか」という問いを、ChatGPT に相談するという実験的なアプローチを取り入れてみました。

多くの人にとって、「キャリアを考える」とは、今の職務から順当にステップアップしていく、いわばニア（直線的）な発想にとらわれがちです。しかし、ChatGPT との対話から得られる提案には、思いがけない視点や、自分の強みと調和する“意外な道”が見えてくることがあります。

たとえば、「学習欲」と「活発性」が強みの人が、社内講師や社外向けの知見発信といった“広げる仕事”に適性を見出すかもしれません。あるいは、「個別化」や「共感性」を強みに持つ人が、キャリア相談やチームビルディングなど“つなぐ仕事”に可能性を感じるかもしれません。

実際に、昨年 6 月から今年 3 月に実施したメンター制度の中では、今後のキャリアについて「マネジメント職」よりも「専門職」を希望する人が多くいました。その理由を尋ねると、「コミュニケーションが苦手だと思うから」との声が多く寄せられました。しかし、ストレングスファインダーでは「親密性」「調和性」「責任感」が強みに挙がっており、ChatGPT は「むしろリーダーとしての素養がある」とアドバイスをしていました。意外な自分の発見につながった一例です。

もちろん、生成 AI が出す答えが“正解”とは限りません。それでも、自分の中にある未発見の可能性に気づくきっかけとして、ChatGPT は非常に有効な“問いかけの相手”になりうると感じています。

生成 AI には、ハルシネーション（事実と異なる回答）が生じるリスクもありますが、それを、正解を求めるための道具ではなく、「人の成長に寄り添う存在」として捉えたいと思っています。

今回の取り組みは、単なるツールの活用にとどまらず、「自分の働き方は、自分で問い直していいのだ」という気づきをもたらしたと思います。

正解を探すのではなく、自分の中にある「まだ知らない可能性」を見つけていく。

それこそが、これからの“働き方”をより自由に、創造的にしていく鍵なのではないでしょうか。

Altus-Five では今後も、AI をはじめとするさまざまなテクノロジーと向き合いながら、一人ひとりの「らしさ」が活きる

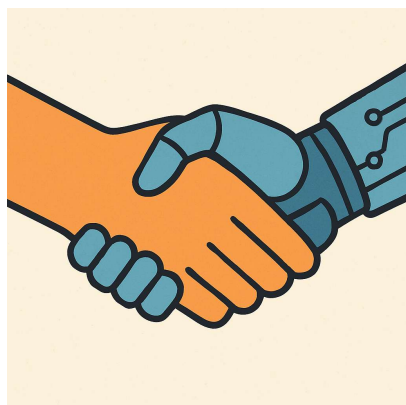
組織づくりを進めてまいります。

お中元として、私たちの小さな実験の報告をお届けしました。

会社からの一言：

ストレングスファインダーと ChatGPT の取り組みは、本格的なものではなく、参考程度のもので位置付けました。さすがに、ChatGPT を鵜呑みにすることはできません。なぜ、そのアドバイスが出てきたのか、その道理が論理的に説明できるようになるまで、まだ慎重にあたるべきかと思っています。（佐藤）

06 AI 時代の働き方を考える



開発部 板子

執筆時点では、梅雨明けとはなっていないですが暑い日が続きます

コロナもすっかり落ち着いた今、夏祭りも通常運転となり、8月にお神輿を控えた今、楽しみよりも怖さが先立

つ思いです

私個人としては、便利なツールが出てきても「どのように働くか」や「どこに力をかけるか」は変わらずに大事なことかと思っています

コロナを経て、リモートワークも当たり前となりチャットやクラウドツールでのやり取りも増えました

昨今は AI の話題もいろんな場面で目にします

今回は、AI、働き方というお題をいただきましたので自分なり感じていることまとめたいと思います

AI と一緒に働くことが本当に増えています

文章の下書きや議事録の作成、コードのサジェストなどと私も実際にいくつか利用しましたが、とくに開発では、部分的な処理については自分で考えるよりお任せしたほうが調査済みの良いものができる場合も多くとても便利に感じました

私はタイプミス(typo)が多い傾向があるので、コードのスペルチェックは非常に助かります

コメントが正しく処理を説明できているかのアシストしもら

ったりと全部 AI 任せにした方が良いのではと思えるシーンもあります

一方で試したことはないですし、実際にそのようなことができるのかはわかりませんが相手の気持ちをくんだコミュニケーションや、ちょっとした空気を読むような場面は、やっぱり人でないと難しい

AI は作業の効率化や補助として大変頼もしい存在といったところでしょうか

それでも、人にしかできないことである

「気づくこと」「工夫する」「つなげる」

はこれらも大切にしていきたいと思っています

AI で効率やスピードは確かに上がると思いますし、それが得られる以上積極的に利用していくしかない存在です

やや感情的な話とはなりますが、仕事ってそれだけではないと思いたいです

じっくり話を聞いたり、表情から感情の機微を感じたり、相手の状況に合わせて少しゆっくり進んだりそういった「人らしさ」が欲しいなあとおじいさんのようなことも考えてしまいます

（とはいえ、最近の AI に“人らしさ”を感じることも、なくはないのですが…）

私たちのような小さな会社では、ガチガチにルールを決めてというよりは、お互いの工夫で回していく場面が多いです

そこに AI の力も借りながら自分たちなりのやり方を作っていくのがしっくりくる気がしています

働き方に正解はないと言われますし、個人としてもそう思います。だからこそ生産性がよく自分たちに合ったやり方を作っていく、それが、しっくりくるのかなという気がしております

どのような未来が待っているのでしょうか

会社からの一言：

確かに空気を読む感覚は、学習データがないので、AI では無理ですね。同じようものとしては、お笑いの“間”も難しそうだけど、これはお笑いの動画で学習できそうです。お笑い特化 AI ができたら、四六時中笑っていられるのだろうか？いや、見すぎて飽きるな。（佐藤）

ChatGPT は頼れる先輩？優秀なパートナー？業務で使ってみて感じたこと



開発部 沢辺

開発部の沢辺です。

前回（今年の夏）、ブリティッシュショートヘアを飼おうか悩んでいるお話をしましたが、縁あって現在は2匹のブリティッシュショートヘアと生活していて猫

中心の日々を送っています。

Web 上ではペットを飼うと年収 1300 万に匹敵する満足度を得られるという情報がありますが、さすがにそこまでの満足度は得られていない気がしています…

今回は、業務で Java アプリの機能実装で ChatGPT を活用した際に感じたことなどお話をします。

既存機能を参考に似た機能を実装するようなタスクだったのですが、既存機能は古くに実装されているもので、ネストが深くいっぱいループしているような実装で、これをそのまま真似て実装したいというものではありませんでした。

最近はずっと Angular で Typescript での実装を行っていた私は、まずはラムダを使いたいと思いました。

Java には StreamAPI というものがある、ラムダな書き方ができることは知っていたのですが使い辛い印象…

本来であればここで公式ドキュメントを調べるところですが、ChatGPT を活用してみたいと思っていましたので、わからないところは ChatGPT に質問しながら実装していくことにしました。

最初はこういう機能を実装したいといった内容で質問しながら使っていたのですが、普通に List を for 文でループしながら処理するようなサンプルコードを提示してきました。期待していた StreamAPI を使用していたものではなかったのがショックでした。

こちらから StreamAPI を使った実装にしたいというような内容に質問を変えたところ、StreamAPI を使った内容でサンプルを提示してくれました。求めているものが来たなと感じました。

その後は StreamAPI の使い方などを細かく解説してもらい、

ちょっと不安なところは公式サイトでも調べて回答の内容を確認したり、ChatGPT は思っていた以上に実用的だと感じました。

StreamAPI を使ってコードを書き終えたところで、大枠の実装は終わっていたので、後は細かいところを ChatGPT に質問しながら実装を進めました。

Java の Calendar クラスでの時間の計算が使い辛いから、LocalDateTime でのやり方を聞いてみたり、

文字列に変数を埋め込む実装は TypeScript ではこうやって書けるけど、Java でも同じように書けないかと聞いてみたり、

ユニットテストの実装でファイル操作のテストをするのにいい方法はないかを聞いてみたり、

ユニットテストの実装で DB を使ったテストをインメモリーでできないか聞いてみたり、

Java の型推論の使い所を聞いてみたり、

どれも為になる内容の回答が返ってきたのですごく良い印象に変わりました。

途中からは ChatGPT が回答に「モダンな書き方をすると」という表現を使うようになってきたり、型推論のところではなるべく議論みたいなこともできておもしろく感じました。

まとめに入っていきます。

まずは問題点になります。

調べ物に使うのはすごく優秀に感じたので素晴らしいものではありますが、簡単にコードのサンプルを入手できるので勉強にはならない。これは誰もが思うことかもしれません。便利な反面、学習の機会を奪ってしまう懸念もあるところに、少し怖さを感じました。

今後、ChatGPT の精度がさらに上がれば「もう勉強は不要」という極端な考え方が生まれる可能性すらあると感じました。

他にはあまり共感する方はいないかもしれませんが、サンプルを貼り付けるだけになってしまうと IDE でコードを書いている際にライブラリの候補を見ながら他にどのようなメソッドが用意されているかを見る実装の楽しみがなくなってしまうと思いました。

少し話が逸れているようにも思いますが、私の中で大事なことなので書き残しておきます。

次に質問の仕方は大事だと感じました。

私は TypeScript での実装を例にして Java ではどうやるのかという質問の仕方が一番回答が良かったと感じています。できればこういった使い方をするのがベストであると思いました。

チーム内の他のメンバーにどのように ChatGPT に質問しているかを聞いてみると、人によって質問の仕方はまちまちです。

質問の内容のことをプロンプトというようですが、良いプロンプトの書き方をチーム内で集めてガイドを作れると効率アップに貢献できると思いますので、これをやる機会を作って今度の働き方に役立てていきたいです。

次に作業効率について。

工数内できっちり実装を終えることができ、単体テストで DB のテストをインメモリー化できたことなど考えると Web で調べながらやるより早くできました。

最後に感想です。

ChatGPT を使っていると、まるでなんでも知っている先輩と一緒に仕事をしているような感覚になり、充実感もあり楽しく仕事ができたと感じられたところはすごく良かったです。最強のパートナーを手に入れたよう感覚かもしれません。

リモートワークが中心だと、常に対話している相手がいるだけでモチベーションなど含めいろいろなところに良い影響があることを実感できたのも素晴らしいと思いました。

私生活では今年からダイエット目的でジムに通っているのですがジムのメニューを ChatGPT に作ってもらっています。

今のところ効果はあるので提案してくれているメニューは問題なさそうです。

ChatGPT は、業務でも私生活でも欠かせない存在になりつつあります。AI との共存によって仕事の質や楽しさが良い方向に変わっていったほしいです。

会社からの一言：

「03」の太田の記事のコメントと被りますが、寡黙なプロンプトは、欲しいレベルの答えが得られないので、十分な前提情報をプロンプトに与えることが大事です。それから、時代は、すでに AI Agent の時代に入ってきたので、それを使った AI の活用方法を深めていく必要があります。独力で「〇〇やってみた」という試行の次に進めるために、社内で AI 会議を設けた方がよさそうです。プロジェクトを超えてナレッジを獲得していきたいと思います。（佐藤）



開発部 雲居

昨年お読みいただいた方も、今回初めてお目にかかる方も、はじめまして。

せっかくなら万博に行きたいなぐらいでしたが気づいたらミャクミャクに

やられ、ますます万博熱が高まっている開発部の雲居です。（前回のモリゾーとキッコロもそうでしたがマスコットの力の偉大さを痛感しております。）

さて、今回のテーマは「AI」「働き方」です。

AI の普及と浸透は昨今著しく進んでおり若者の間では ChatGPT が「チャッピー」の愛称で生活の一部になっているようです。私もまだまだ時代に取り残されないようにチャッピーと呼んでいきたいものです。そんなチャッピーを含む生成 AI は私の日々の仕事にももちろん浸透してきております。そこで今回は仕事において、その影響を通じて私が考えるようになった「働く意味」について少しお話ししたいと思います。

「働かない」という選択肢が、もはや遠い未来の話ではなくなってきました。生成 AI やそこに伴う自動化技術の進化によって、人の手を介さずに成立する業務が、現実味を帯びてきたと感じております。ただその一方で、「それでもなぜ私は働くのか」という問いに、自分なりの答えを持つことの重要性も増しているのではないのでしょうか。

私は IT 業界で働いて 7 年目になります。ここ数年で、働き方は劇的に変わりました。ドキュメントの作成支援やメール返信の草稿、コードの雛形生成・補完、テストケースの作成など、以前なら自分でやっていたことの一部は、今では生成 AI に任せるようになりました。チームでも AI ツールの導入が進み、日常的な業務が少しずつ「人がやらなくてもいい仕事」に置き換わってきていると感じております。日々更新されるスピードからこの流れは加速度的に進んでいくと思っております。

AI によって人の手を介さずに遂行できる作業が急速に拡大する中で、社会全体でも“働く”という行為の前提が変わり始めてきていると思います。社内業務の大幅な AI 代替によって、これまで人が行っていた作業の大幅な工数削減、それに伴い新規事業(価値創出)に集中できる体制を目指すとした記事をよく見かけるようになりました。こうした事例は、企業全体とし

で“働かないでも回る組織”が現実になりつつあることを示しており、個人の働き方にも大きな示唆を与えていると感じております。

一方で、私はこの変化を大変歓迎しつつも、「働く意味」について深く考えるようになりました。私にとって働くことは、単に収入を得る手段だけではありません。(それだけならとくに今の仕事を辞めていると思います。)プロジェクトを進める中でチームで議論し、壁にぶつかりながらも何かを作り上げていく経験、チームメンバと会話を重ねながら共に成長していく過程、そして完成した成果物に対して感謝の言葉をいただいた時の手応え——そうした体験が、淡々と過ぎていく日々には張り合いや達成感を与えてくれているのだと感じております。

生成 AI がいかに優秀であっても、そこに「誰と、何のために、どう進めるか」という問いは存在しないと考えております。それを設定するのは、やはり人間であり、私自身。その問いに向き合い続ける過程にこそ、働く意義があるのではないかと考えております。

極論を言えば、技術的には“働かない”ことも可能な時代に、あえて“働く”ことを選び続ける理由——それは、自分の存在が何かの役に立っているという実感や、人とのつながりから得られる充足感にあるのかもしれません。(私自身はそう思っております。)

これからの社会では、「働くか／働かないか」という二元論ではなく、「どんな価値を持って、どう働くか」が問われていくように思われます。

選択肢が広がった今だからこそ、私たちは“働かない自由”の存在を知ったうえで、“働く意味”を自分の言葉で語れるようになる力がこれからの社会では大きな価値を持つのだと感じます。

AI がもたらす技術革新により、遠くない未来で私たちの働き方は大きく変わっていくことでしょう。しかしその中で、自分が“働く理由”を選び取ることこそが、これからの時代の一番の自由なのかもしれません。

何を言っているのだと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、この文章が少しでも“なぜ働くのか”を考える一助となれば、幸いです。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

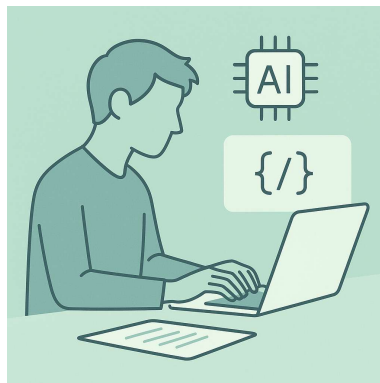
P.S. このタイトルは、AI に文章を読んでもらって考えてもらいました。自分ではなかなか思いつかないインパクトのあるタイトルになったのではないのでしょうか。

会社からの一言：

完全に働かなくてもよい時代が来たら、会社の存在意義は何だろう。働かなくてよいけど、それでも利益を追求した先には、ラグジュアリーな生活があるのだろうか。だとしたら、そんなに欲しくはないか。1 つ答えがあるとしたら、“社会貢献”は存在意義になりそうです。私も歳のせいか、社会に貢献したい気持ちが沸々としています。(佐藤)

09

実体験から考える「AI と仕事の付き合い方」



開発部 鈴木

梅雨になったと思ったら、梅雨はどっかにいっ
てしまい急激に暑くなり、暑すぎて最近納車したバイクに乗る気になれず全然乗れていません。
ここ数年の夏の暑さはあまりに酷く、冬に雪が基

本降らない地域に住んでいる私にとっては冬より夏の方がバイクに乗る機会が少なくなっております。

2 度目の執筆になります。開発部 4 年目の鈴木です。

今回のテーマは「AI」「働き方」です。

AI の普及と浸透、また AI の成長はすさまじくどんどん AI を使うことで仕事の効率が上がっていると思う反面、私は数年後仕事があるのだろうかと不安のメリット・デメリット両方感じております。今回は AI が私の仕事を楽にしているのかについて書かせていただきたいと思います。

私の携わっているプロジェクトでは、プロジェクトのコードを AI に丸投げして修正や PR コメントをもらうなどすることは許可されていませんので、部分部分で使う使い方をしています。このような使い方をしている前提で私が感じていることを書かせていただこうと思います。

私は IT 業界で働いて 4 年目になります。私が働き始めた 2022 年には ChatGPT が話題になり始めており、そういう意味では私は AI を完全に使用していない働き方というのは経験していないことになります。しかしながら、入社当時は「この程度の精度なら今まで通り自分で調べたほうが結局楽だし速い」だったのが、ここ 1 年強、特に GPT4o から急激に精度が上がり AI の利用頻度が確実に上がっています。

仕事で AI を利用している中で私の仕事が楽になった、逆に仕事が増えたと感じていることを挙げたいと思います。

楽になったと思うこと 1 つ目は公式ドキュメント、特に英

語のドキュメントの確認です。私は英語が全然できませんので、AI 普及前は必死に Google 翻訳で翻訳を繰り返して読んでいくというなかなか骨が折れる作業でした。しかし、AI に公式ドキュメントの URL を張り付けて ChatGPT に「ページを要約して」と依頼すれば、きれいにまとまった要約を日本語で出してくれます。これを元に公式ドキュメントをブラウザ機能で日本語化してから確認すると、少し変な翻訳されている部分があっても内容が頭に入りやすいです。また、DeepL などの AI を使用した翻訳サービスの普及で翻訳の精度そのものも格段に向上しており、ドキュメントを直接読む労力も少なくなりました。

2 つ目はエラー修正です。本プロジェクトでは先に書いたようにコードの丸投げはできないですが、それでもエラー文を投げるだけでいい精度で間違いを指摘してくれますし、間違えた回答であっても解決のヒントになることが多いです。今まではエラー文で検索して、Stack Overflow などで似た事例を探し、それをヒントにエラーを潰していくと言ったやり方をしていたので、それに比べれば格段にエラー対応は楽になりました。

逆に新たに仕事が増えたと思うこと 1 つ目は AI に質問する文章を考えることです。AI の回答は同じことを聞いても聞き方次第でかなり変わってきます。いい回答を得るためには、いい質問をしなければなりません。これが結構大変だと感じています。私が質問する際に意識していることは「流れを質問すること」と「必ずソースを提示させること」です。いきなり聞きたいことの本題を聞かずに大枠からやり取りを繰り返して本題まで内容を狭めていくといい回答を得やすいと感じています。また、ソースを提示させることで、回答の精度を確認しやすくなりますし、変な回答が返ってくることが少なくなると感じています。

2 つ目は 1 つ目にも関わりますが、AI の回答を精査することです。特にここ 1 年強で精度が格段に高くなった結果、ぱっと見で回答の間違ったところを判別するのが非常に難しくなっていると感じています。こちらもちょうど書いたように「ソースを明確にする」よう指示すると間違いが減り、かつ間違えていてもソース元と比較をすることで比較的容易に間違いに気付けると感じています。

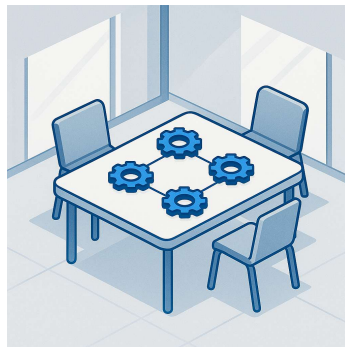
今後も AI はさらに普及していくと思います。AI をうまく活用しながら、業務の負担を軽くしていくと共に、AI をうまく活用できるように努めていきたいと思っています。

会社からの一言：

エンジニアの仕事が AI で置き換わってしまう恐怖は、確かにありますが、過渡期の不安なのだと思います。今後のエンジニアリングに求められることは変わっていくのは確実として、でも心配しなくて大丈夫。スキルが高くて開発センスのある人が、今までよりも、もっと面白いことを始めます。

自分たちでそれを発信できなかったとしても、そういう面白い仕事をいち早く取り入れていけばよいのです。（佐藤）

10 事業会社としての歩みを始めました



開発部 佐藤

最近、新しい PC を買いました。CPU が Ryzen AI 9、メモリ 64G、7 型有機 EL、重さ 600g の超パワフルなポータブルゲーミング PC です。外出しての打ち合わせにも楽々持っていけま

す。カバンにパワフル PC を入れて・・・、待てよ、7 型ディスプレイは老眼の私には無理だからポータブルモニターも必要だな、おっとキーボードもないから、ポータブルキーボードも必要だな・・・って、普通のノート PC より重！（笑）

さて、弊社で取り組んでいる新規事業について、ご紹介します。

AI の進化によって、これまで SI 案件の依頼元だった企業が内製化を始める、あるいは内製化を強めていく会社が増えると予想されます。

そして、エンジニアの仕事は、AI が生成したコードのレビューという、ダルい役割を担わされることになっていきます。一番楽しいプログラミングという仕事が、AI で置き換えられていきます。

しかしながら、日本は、人口減少による人材不足や、AI の活用がそこまで進んでいない現状から、平場の仕事状況は、急激には変化しないと思われるので、当面は、今のままでも飯が食べそうです。

ただ、SI という事業モデルの将来は、あまり楽しくないかもしれないです。

米国で起きていることが、3 年後に日本でも起こると、よく言われています。今、AI の活用が一番活発なのは米国なので、そこで何が起きているか知ることは大事なことです。GAFAM や、SAP、Salesforce などの巨大企業での大量のレイオフ、それから、新卒採用が激減しているとニュースもありました。大量のレイオフもそうだけど、新卒ができる簡単な仕事は AI がやるからというのが、雇用が減っている原因の 1 つだそうです。

3 年後に日本で AI の活用が活発になっていると、日本の場合

には雇用の保護が手厚いので同じにはなっていないだろうけど、"待機状態の社員が増えている"みたいな状況は十分にありそうです。

このまま、日本社会の状況を静観して、ヤバそうな雰囲気は漂ってきてから動いたのでは、きっと遅いので、会社が元気なうちに、新たな道筋を見つける必要があると判断しました。

新規事業への取り組み

さて、何をやっていくのか？

弊社は、20 年近く経営してきたけど、20 数人規模の会社になんてなっていないです。労働集約的なビジネスモデルである SI において、頭数を増やすことが最大の事業拡大施策なのに、開発の仕事が好きすぎて、事業拡大を二の次にしてきてしまったというのが原因です。

たぶん、これからも、それは変わらないでしょう。つまり、そういう会社なのです。

そんな開発好きの会社がこれから歩いていく道は、さらに "らしさ" を追求して、R&D を含めたプロダクト開発が相応しいです。

小さい会社ゆえに、なかなか自社に投資するということできていなかったけど、超ニッチなプロダクトを開発するのは、実にアルタスファイブらしいです。

この超ニッチな自社プロダクトに、AI の余波を受けづらいリアルな業態を組み合わせた事業展開を目指します。

新規事業とは言え、まったくの異業種にチャレンジするのは心許ないです。優秀なマーケティングがいるわけでもないのに、自分たちの身の回りにあることで、自身が利用者でもあり潜在要求がわかっていることを事業にする。これを方針として、手始めに「貸し会議室」の事業を開始することにしました。

コロナ以降、仕事はリモートでの勤務が多くなって、会社での執務エリアに、広いスペースは必要なくなっています。多くの企業でも、スペースの縮小を進めていると聞きます。弊社も入居していたビルから、ビル全体をリノベーションすることで退去依頼があり、昨年に事務所の移転することになりましたが、タイミングとしてもちょうどよく、スペース縮小を検討しました。同時に、逆転の発想で、今のままか、より大きいところにして、スペースの半分を貸し会議室で貸し出すことで、空きスペースを有効活用してはどうかとも考えました。検討の結果、貸し会議室の事業をやってみることに決めて、それなら立地条件のよいところの方がよいので、新宿 3 丁目の駅直結のビルに移転することを選択しました。

現在は、内装工事を入れて、敷地の半分を貸し会議室にしたところ。これから他社製 SaaS の予約管理システムを導入して、7 月中には貸し会議室の営業を始めます。

そして、そのあと、予約管理システムを、1 年かけて内製化して置き替えます。内製化した「貸し会議室の予約管理システム」も、1 つの自社プロダクトとして、展開していきます。

システム内製化による競争力強化

システムを内製化することの意味は、いろんなところにありそうです。

○知財の創造

SI 事業の中でも、フルスクラッチの開発を多くやっている、手元に知財が残りません。依頼元の企業のお金でシステムを開発しているので、開発した成果物は依頼元企業の資産であって著作権も主張できず、自分たちで開発した成果物なのに、別の案件に使いまわすことができません。これは、永年営んでも、再利用できるアセットの積み上げがなく、生産性の向上を追求しづらい事業パターンです。特に下請け仕事は、この傾向が顕著です。

貸し会議室の予約管理システムを内製化するということは、自社の知財を創造することであり、再利用可能なアセットを積み上げていくことになります。

当然、自社プロダクトで開発した成果物は、どんな SI 案件にも、再利用可能です。極端な話、コピペして転用してもよいわけです。生産性という観点でも、実績（ポートフォリオ）という観点でも、他社との差別化の 1 つになるのではないかと考えます。

○マイクロサービス化によるノーコード開発

予約管理システムは、マイクロサービスの組み合わせで構築します。予約管理システムを 1 つ目の自社プロダクトとするなら、2 つ目、3 つ目と自社プロダクトが増えていくと、マイクロサービスのバリエーションも増えていきます。コードを書かずにシステムをマイクロサービスで組み上げるという考え方で、ノーコード開発を実現しようという目論見です。

世にあるノーコード開発のツールは、コードの自動生成によるものが多いですが、そうではなくて、出来るだけ開発済みのサービスを使うという考え方です。

コード生成型のノーコード開発ツールも、完全自動なノーコードにはなっていないくて、実現できない機能については、カスタマイズが必要になります。これは、マイクロサービス型でも同じです。

自社プロダクトとして構築するマイクロサービスは、拡張性

を高めるためにクリーンアーキテクチャーを採用しています。できるだけ、すべての機能がプラグインによってコンポーネントの置き換えが可能で、処理がインターセプトできてデータの書き換えができるように作り込んでおきます。カスタマイズが必要な場合には、既存のコードを修正するのではなく、プラグインで置き換えることで機能を拡張します。

コンポーネントの入れ替えや、インターセプターでのデータ加工は、サービス指向のアプローチとして、一般的なやり方なので、このマイクロサービスの開発で学んだことは、自社プロダクトではない、SI 案件にも活かせるノウハウです。

ノーコード開発ツールのマニュアルを読み込んで、その開発ツールでのカスタムな開発方法を勉強するのと、より一般的で転用可能なマイクロサービスの開発方法を学ぶのと、どちらが好ましいかという、間違いなく、マイクロサービスの開発を勉強する方です。

○実践的な教育の場

自社プロダクトの開発は、若い人たちの実践的な教育の場としても活用できます。昨今の SI の開発案件は、半分以上が新規開発ではなく、エンハンスや保守の仕事です。ゼロイチでシステムの開発をするという機会が少なくなっています。

自社プロダクトの開発は、何もない状態から、どうやって仕事を進めていくのかを思考し学習できる、非常に有益な教育機会になります。思いつくところでは、以下のようなことができます。

- ◆プロダクトの BO や PO の役割は私で、PM、PL を若い彼らにやってもらうことができる。
- ◆貴重な要件定義フェーズの経験もしてもらえる。
- ◆アーキテクチャーを考えたシステム構成の検討や、設計の機会にもなる。

SI の下請け案件では、これらを経験することが、なかなかできません。弊社の直請け案件の場合でも、若い未経験者を PM としてアサインすると、納期が怪しくなるので、やりません。でも、自社プロダクトであれば融通が利きます。

自社プロダクトの開発は、若いうちに様々な経験をしてもらう教育の場として、とても適しています。

OSS 化による業界への貢献

SI 案件でも、さまざまな OSS を活用していますが、使っている OSS にバグが見つかった時に、そのバグ修正は PR を送付して、マージしてもらうのが OSS を使うときの常識です。しかし、日本人は、これをやらないのだそうです。海外では、日本人は、タダで使うだけ使って、バグ修正などには非協力で、ズッコイと批判されているそうです。

実は、私も、PR を送ったことはありません。英語が苦手というのが理由なのだけど、恥ずかしい限りです。せめて、日本語が通じる OSS コミュニティでは、OSS 利用のモラルとして、バグ修正などでコミュニティに貢献したいし、そうすべきです。

システム開発の業界にあって、真っ先に思い浮かぶ社会貢献は、OSS です。自社プロダクトを OSS 化する目的の 1 つは、社会貢献の 1 つでもあります。

OSS にすることで、複数の企業と共同でプロダクトを利用し開発することができると、合理的な体制を構築することができます。特に、弊社と同じくらいの規模の中小企業の皆様には、メリットにもなるのではないのでしょうか。

個社では困難な大規模開発も、複数企業の連携によって実現可能になると考えます。

まとめ

リアルな業態の事業を実際に運営してみることは、事業会社としての側面を持つということでもあります。今までは、要件をヒヤリングする側だったけど、ヒヤリングされる側の立ち位置も経験することになります。事業会社としての事例が増えていくことは、上流工程を顧客側、開発側の両面から実践できるので、深い学びになると期待しています。

営業よりご案内：

この話題とは離れますが、前号では、「MINR desktop」というデスクトップアプリを開発中であると、記事内に記載しましたが、ようやく完成し、先頃リリースし、[プレスリリース](#)も配信しました。

まさに、超ニッチを地で行くプロダクトですが、現在は、セキュリティを考慮して、ローカル PC 内にのみデータを保存するようになっていますが、チーム内のメンバーの活動をオンプレの RDB で集中管理してタスクマイニングしたいとか、パートやバイトが多い業態での就業状況の集中管理などにも役立つかもしれません。様々なカスタマイズをお請けできますので、ご依頼くださいませ。

11 お菓子紹介



管理部 宇野

ラッピングにこだわりたい気持ちがある管理部 宇野でございます。思い描く仕上りのイメージはあるのですが、思い通りの素材がなかなか見つかりません。ほしい素材を探し求めるのは

とても時間を要しますので、どこかで折り合いをつけないとな〜などいろいろ考えながら、お菓子もラッピング資材もネットサーフィンの日々でございます。

今期も日頃の感謝の気持ちを込めまして、社内で食べ比べしたお菓子をご紹介させていただきます。

▼芋パイ（安納芋のスイートポテトパイ）



個人的に焼き芋は安納芋が一番好きで毎年取り寄せております。そんな中で見つけたこのパイ！！！！絶対おいしいのではと思い試しました。安納芋は甘さとしっとりした食感が特徴のさつまいもです。焼き芋に変身した安納芋をペースト状に仕上

げ、温度や仕上りに注意しながら材料を混ぜスイートポテトを作る（もうこの時点で絶対おいしい）。そして、パイ生地で包み、香ばしいごまと風味豊かな岩塩をトッピング。180℃のオーブンで約40分間じっくりと焼き上げることで、絶妙な食感を実現しています。そのままでもおいしいですが、トースターで少し温めるとさらにおいしくいただけます。芋好きならば間違いなしのおやつです。

▼桂新堂 炙り焼き（赤えび・甘えび）



こちらも定番のえびせんべい！桂新堂はいろいろなおせんべいがありますが、こちらは炙り焼きのおせんべいです。赤えびと甘えびの食べ比

べ。甘えびは北海道を中心とした国産甘えびを使用し甘みを最大限に引き立てた仕上がり。赤えびは5回ものリニューアルを重ね、今年さらに進化を遂げ「開封3秒で、もう虜」というキャッチコピーを掲げ、えびの香りを生かし、雑味を抑えた製法にこだわったお菓子でございます。えび好きにはたまらない一品です。そのまま食べておいしいのはもちろんのこと、チーズをのせてトースターでリメイク。とんでもないおつまみが出来上がります。ネットでも店舗でも入手できますので、是非、百貨店などで探してみてください。

今年もあるのかないのかわからない梅雨があけますね。今夏も水不足や真夏日すぎる猛暑やゲリラ雷雨に襲われる未来が見える気がします。今は小学生も日傘をさして登下校する時代です。折り畳み傘を持ち歩き、日差しにも雨にも対応し、酷暑を乗り切りましょう。

次回のお菓子もお楽しみに。

会社からの一言：

この芋パイも、なかなかです。安納芋のお菓子は、どれもおいしいですね。これも UMAKAIDO です。

最近、私の YouTube は、お菓子食べ動画で、埋め尽くされて、どうにかしてほしい。（オヤツ食いの自称プロ 佐藤）

次号につづく